

キリストに結びつけられていなかったら、とっくに消え去っていただろう」と語り、ピコ・デラ・ミランドーラも「トマスがいなかったらアリストテレスは啞のままだったろう」と話したと伝えられるが、同じことがプラトンとアウグスティヌスについて言えるかどうかは知らない。しかし中世哲学なくしては、総じてこんにちの哲学が成立しえなかったことはたしかであってみれば、プラトンの「哲学」に迫ろうとする者がアウグスティヌスや中世哲学を無視することは、おそらく許されないであろう。

提題

プラトンの *philosophiā*

松 永 雄 二

φιλοσοφία というのは、異様な言葉である。一般に、知とは、つねに「……についての知」という仕方であらわれ、そこにさまざまな *ἐπιστήμαι* (scientiae) が成立するものとみなされる。しかし、プラトンにおいてこの語は、そしてその動詞形 *φιλοσοφείν* というのは、そのような仕方での対象領域を明示されないままに、たとえば「知を愛し求めながら生きねばならない」*φιλοσοφούντά με δεῖν ζῆν* (『弁明』28E) とか、また、「知を求めることは、死を練習することである」…… (sc. *φυγή*) *ὁρθῶς φιλοσοφῶσα καὶ τῷ ὄντι τεθνάναι μελετῶσα ῥαδίως* (『パイドン』67D, 80E) という風に、端的に語られているのである。ではそのような *φιλοσοφία* とは、いったい何であるのか。われわれは即座にそれを、何かわれわれの学的探究の総体をなし、特にその原理的な事柄にかかわる知的な営みであるとか、あるいはまた何か特別の存在（永遠不変の存在）にかかわる知であるとか、さらにはまた単純に、何かわれわれがよく生きる (*εὖ ζῆν*) ためになくしてはならない知であるという仕方、定式化してはならない。なぜなら、差当っていえば、「知を愛し求める者」というのは、とりもなおさずその *φιλοσοφία* という謎——それはまったく異様なものでありながら、しかもわれわれ人間にとってつねに必然的であるような謎——に耐え、それをみずからの思索の途において方法化しえたひとに他ならないか

らだ。いいかえれば、*φιλοσοφία* とは、ただ哲学するひとの現存においてのみ、その意味をもつのであり、そしてそこにおいてこそ、しんに哲学としての普遍性を確得するものなのである。わたしには、真実のところ、プラトニズムというのが果して何であったのかは解らない。(それを哲学的に厳密に跡付けることはまた別の仕事に属しよう)。ただわたしはここで、プラトンにおける *φιλοσοφία* の意味を可能なかぎり明らかにすると共に、その哲学のもつかたちと問題をできるかぎり明確にすることに、ひとりの提題者としての責務を限定したいとおもう。そして付言すれば、その考察はとりもなおさず、われわれが「プラトニズムと中世哲学」という主題全体に迫りうる一つの方途を、——つまりはプラトニズムと中世哲学というその両者を結節させる問題場面(=「と」)を哲学自身にとって本質的な問いとして浮び出させる一つの方途を——示すもののように、提題者には思われるのである。

I. プラトンの「哲学」の位相。これを決定したものは、いうまでもなくソクラテスの現存にある。ところでソクラテスの哲学が、倫理的な事柄の考察に局限されていたという表現は、あやまりを生み易いであろう。ソクラテスは、それをわれわれの知がかわる「最大の事柄」*τὰ μέγιστα* (『弁明』22D, 『アルキピアデス第1』118A)と名付けた。そしてまさにそのような「最大の事柄」においてこそ、われわれ人間のもちうる知のあり方が、徹底的に問われねばならなかったのである。すなわち、ソクラテスのいわゆる「無知の知」というのは、われわれの生きることに於いて様々な仕方で登場してくる知の問題を、何か概括的に論じたものでは決してなかった。すなわちソクラテスは、諸技術知のかわるそれぞれの対象領域においては、その事柄についての知者と不知者の区別が判然とあることを、まず承認する。そしてその場合には、ひとは、(1)その事柄を知っているか、あるいは、(2)その事柄を知らないが故に、そこにおいてはみずからの無知を認め、その事柄の判定を他の知者に委ねるかするのであって、決して、(3)自分が知らないのに知っていると思うことはない、とされたのであった。ところがこの事情は、まさに問題の「最大の事柄」にかかわる場合には一変する。すなわち、善・悪、美・醜、正・不正などについては、通常ひとは、前述の場合にあってはむしろ例外とされた(3)の状況、つまり知らないのに知っていると思うという状況のうちに、一人のこらず居るとされたの

であった。ではその場合に、つまりは知る者の不在の場で——この場合、知者は神のみがそれであるとされる——なおわれわれは、(3)の状況がみずからのものであることを拒否することを、いったい如何なる意味においてなすのか。それはとりもなおさず、ソクラテスにとっては、まさに神命としての *φιλοσοφία* の意味 (『弁明』28 DE, 30 AB)であり、そしてそれはそのままプラトンの、何よりも人間という存在者のあることの根拠を問う、*φιλοσοφία* の意味でもあったのである。なぜなら、われわれ自身があるとかなくすということが、諸技術知の場合のように、「……として」(例えば大工として etc) というその限定をぬきにして問われる場合、つまりはまさに「よくなす」*εὖ πράττειν* = 「よく生きる」ということが端的に問われる場こそが、ソクラテスのいう「最大の事柄」が現われる場面だったからである。いいかえれば、われわれ自身の存在とか行為というのは、つねに端的な仕方である「善」とか「存在」そのものといういわば普遍にさらされている場面においてこそ、その意味をアポリア的に見出すもの、だからである。そしてソクラテス・プラトンにとって *φιλοσοφία* とは、そのような状況をまさに人間存在の本来的な行為である知の問題として方法的に問いつづける途にはかならなかったのである。

II. 魂(プシュケー)論。プラトンのいわゆる魂と肉体との二元論、つまりは肉体からの魂の分離ということの問題とすると、われわれはその思索が、つねに普遍にさらされているものとしての人間存在という端的な把握の上に成立したものであることを忘れてはならない。そしてその意味で、その思索はソクラテスの「魂の世話」(アレテー・徳への留意)という主張と直結する。なぜなら、卓越性としてのアレテーの問題を、さきほどの諸技術知の場合にみられるような個々の能力をもつ者の卓越性(例えばよき大工, etc)とか、単に自然においてあるものの卓越性(例えばよき馬, etc)から区別して、まさに人間というそのものの卓越性(=徳)が如何にして成立するかを問うことは、そのまま端的な仕方人間存在の成立の根拠を問うことであり、そしてそれは結局は、われわれが如何にすれば、「善」そのものとか「存在」そのものの知にあずかり得るかという問——もろもろのアレテー例えば勇氣とか節制はすべて善悪の知にほかならない——に帰着するからである。

そしてそのとき、その人間という存在者のあり方をめぐって、魂と肉体という区

別、および後者からの前者の分離という主張が、明確に語られるようになる。というのは、われわれが魂を肉体から分離しえないかぎり、そしてまさに魂を魂そのものとして把える場をもち得ないかぎり、われわれは、われわれのもつとされる様々な能力（感覚、etc）においてそのときどきに見出される現実 *παρον πάθος* を、まさに存在するものとして把えるという状況から脱することは出来ないからである。すなわち、そこでは、われわれが本来そこにさらされているものとしての普遍は覆われたままにあるのだ。そしてプラトンは、そのような状況のもとにおけるわれわれのいわゆる存在者の把握を、ドクサ（思いなし）と名付けたのであった。

さて、であればプラトンの場合、魂と肉体の二元論というのが、魂＝神的なもの、肉体＝死すべきものという把握を最初から前提として成立していたと考えることは、あやまりであろう。それはむしろ、われわれがわれわれの行為と知の意味をたずねる場合に、その問いがそれなしにはその問い自身の場を持ちえないという仕方では、魂の問題はつねにあったのである。すなわちいいかえれば、プラトンにとって魂とは、それ自身のみが「存在」そのもの——それは神的なもの *τὸ θεῖον* に他ならない——とのかかわりを持ちうるものとして、そのかぎり、それは、他の一切のいわゆる存在者とは生れを異にするものとして見出されねばならなかったのである。

III. アイデア論。 以上のような観点からみると、わたしはプラトンの哲学を *physica-metaphysica* という仕方での形而上学と把え、アイデア論をその枠組において考察することに、疑問を感じる。まずアイデアが「それ自体においてある」というのは、けっしていわゆる個々の感覚的事物からの単なる離在を語るものではなく、それはむしろ、先程の、われわれが普遍にさらされているという場において、善とか美とか正義というのは、何かそのつど感覚するわたしにとってのみあるという規定からは離れて、まさしくそれ自体としての存在をもたねばならないということの、表明だったのである。そしてほかでもなくわれわれの知の成立の可能というのは、その、それ自身としてあるそのもの＝アイデアの存在に、その根拠をもつのである。

してみれば、プラトンのいわゆる二世界説というのは、けっして永遠不変の原範型としての存在者＝アイデアの世界と、生成消滅するもの＝アイデアの似像としての感覚的事物の世界という、二つの領域の単なる存在的な区別を語るものではなく、そ

これはむしろ、われわれがわれわれの^{ある}ことを、「片時も同一を保たないもの」というつまりはドクサ的な把握の場に埋没させてしまうか、或いは、「つねに同一性においてあり同一のあり方を保つもの」という存在そのものとの^{かかわり}の場でそれを把えることが出来るかという、その根源的な二者択一を示すものとして、つねにあったといえよう。さてこのようなプラトンの思索が、まさにアイデアの「離在」と「分有」という、いわば存在自体のもつアレーティアの構造をめぐる、以後いかなる哲学の問題を生みだしたかについては、今はそれを語る時間的余裕はすでにない。ただ以上の考察にもしも大きな誤りがないとすれば、プラトンのアイデア論の意味とは、存在とか真理という問題をわれわれが問わねばならない必然性をもつ場面の構造を、まさに *φιλοσοφία* 自身の問いとして問うことにあったといえるのである。そしてそのかぎりプラトンの哲学というのは、単に或る時代の思索のひとつの記念碑として終るものでは決してなかったのである。

提題

アウグスティヌスのプラトニズム

加藤 信朗

中世のプラトニズムの問題は何らかの意味で「プラトンの」な中世哲学の諸類型の呈示と源泉の探索で終ってはならない。それらがいかなる意味で「プラトンの」であるのか、つまり、いかなる意味で「プラトンの」哲学とかかわるのが問われねばならない。これは「プラトニズムとは何か」を問うことであり、また、「プラトンとは何か」を問うことである。アウグスティヌスのプラトニズムについてもプロティノスの影響が語られ、ポルピュリオスの影響が語られる。しかし、これら源泉への探索に先んじて、これらの仲介者を通じてアウグスティヌスが学習し、みずからの骨肉としたプラトン哲学が何であったかの問がある。このようなものがアウグスティヌスの内にあったとする時、アウグスティヌスの主要著作が *actualitas* をもった中世世界に、プラトンの哲学もまた何らかの *actualitas* をもったと見なされなければならないだろう。おもうに、中世哲学の中でもっとも重要なプラトニズムの問題